







佐々木 晃一氏

く通っている場所にも歴史の足跡が残されています。皆さんも、旭地区を歩きながら、先人たちの足跡をたどり、その功績に思いをはせてみてはいかがでしょう。

文責 吉岡 芳夫

リレーエッセイ

熱年別居、その功罪 寺岡 弘文

まず私の自己紹介から始めます。私は、大日本帝国敗北の一年前一九四四年にこの世に生を享けてから、高校を卒業するまで福井に住んでおりました。その後、大学・大学院とオーバードクター（博士浪人）の計十年半を、正に青春時代を、京都で過ごしました。

その最後の最後、ようやく富山大学薬学部和漢薬研究施設に就職が決まって、京都を離れる直前の一九七三年八月末、大学時代に下宿していた大家さんに挨拶に伺ったことが縁で、今の妻と知り合いました。翌春に結婚して、長男は富山で生まれました。

一九七五年四月には東京

たが、退職まで派出所の副所長などを務めながら派出所一筋でした。

交通違反の検挙数も署内最大で「エントツ男」と呼ばれたこともあります。派出所の管轄地域は城下町のような感覚で、この城下では犯罪を起こさせない。住民を守る。との覚悟を持っていました。

ある非番の時に（もちろん私服）消火栓の上に駐車しようとする車があったのでその運転手にこれは違反になると伝えたところ、その人は怪訝な顔をして「オタクは誰？」と聞いたので、私もハツとして「申し訳ない、派出所の所員です。」と言ったところ、「すみません。すぐ移動します」と慌てて車を動かししました。

二十年間勤務しましたが父親が亡くなり、鯖江の家

サークル活動の報告 知って楽しい世界史の会 主宰者 酒井 慎夫

今年度から始まったこのサークルの第一回は、ウクライナとロシアを取りあげました。四つのYoutube



日本統治時代の台湾の小学校

第二回目は、台湾の歴史について、一時間の動画を視聴しました。実際には、一時間の動画を通して視聴するのではなく、第一章から第八章まで、時代ごとに区切られている動画で、参

動画、「兄弟か敵か」ではウクライナとロシアにまつわる歴史を、「ウクライナ侵攻」ではロシア軍による軍事行動の歴史を、「ロシア革命」、「スターリン体制とは？」および「ソ連は何故失敗したのか？」では、現在のプーチンが率いるロシアがどのような経緯を経ての成り立ってきたのかを学びました。視聴する動画は、とても分かりやすく作られているので、世界史の知識のない筆者にもよくわかるものでした。

加者が関心の高い時代から、これまでどのようなことが分らなかったのかなどを会話しながら、視聴していきました。ちなみに、関心が高かったのは、日本が統治していた時代はどうであったか、その前のヨーロッパ勢力の台湾進出ではどのようなことが起こっていたのかなどでした。近代になってからの戦後台湾の混乱や、台湾の民主化の経緯をへて、台湾と中国の現状も学ぶことが出来、台湾有事とは？など現在の政治問題についても、理解を深めることができました。

学校の歴史の授業とは違って、テレビの歴史番組を見えるような感じで世界史を学べるので、ぜひたくさんのご参加をおねがいします。なお、次回は、朝鮮がどうして南北に分断されたのか？その歴史を勉強しましょう。

吉岡 芳夫記

川柳同好会 七月例会の個人別優秀句

言い訳は何でも歳のせいにして

南部 歳子

漬物でサラサラ茶漬け

夏ごっつお

ロボットが人を洗う日

待っている

日に紅く小枝に桃が

十七個

夜なべして昔縫い物

今韓流

一度でいいベレー帽かぶり

画家気取り

暫くね名前出てこず

照れ笑い

何事もとらわれないぞ

生きる道

鳥たちも熟したイチジク

狙ってる

この暑さ 野菜作り

吉岡 芳夫

水欲しくお花が見えている

あの蛇口

金高値探して見よう

古タンス

ぼけ防止聞いた教訓

もう忘れ

四股を踏み負けてなるかと

勇み足

山田 良彦

大野 勉



寺岡弘文氏

（いのはな）湖（こ）、瀬戸で浜名湖に繋がっている）の浜松市浜名区三ヶ日町の東急リゾートタウン内に、敷地が広くて庭いじりもできる一戸建てをみつけました（二〇十七年）。妻は京都出ですが、外国人観光客が大挙して押しかけて、すっかり様変わりした京都にはもう戻りたくないというところもあって、子供たちが住んでいる東京にも、もちろん福井にも、そして関西にも比較的近い三ヶ日町に決めました。

浜松は、歴史的・文化的にも科学技術的にも優れた土地柄で、うなぎや浜松餃子、三ヶ日みかん、三ヶ日牛など、美味なる名物にも事欠きません。トヨタ、ホンダ、スズキ、ヤマハ、カワイなど、モノ作り発祥の地でもあります。福井はもちろん住みよい土地柄ですが、寒くて雪が深い冬季はなかなか大変です。夏季には快適な福井（一乗谷）と、冬でも温暖な浜松（三ヶ日）を住み分ける積りで、七年前から妻は三ヶ日、私は一乗谷を拠点に暮らしています。時々は一乗谷と三ヶ日

を往来していますが、一人暮らしになってからは、安否確認もあって朝晩の挨拶（スマホのメッセージや会話）は欠かせません。

前置きが長くなりましたが、本題に入りましょう。結果的に私と妻は熱年別居となりました。一人暮らしになって、家事全般を一人でこなす事は大変です。掃除洗濯もあります。一番大変なのは三度三度の食事の準備です。そのための買い物は私ですが、得意料理はあります。天婦羅、トンカツ、焼き魚です。妻は、夫である私や子供たちに、長い間如何に貢献してくれたのか、自分だけでなく一家のために献身してくれたかが身にしみて判りました。二人で同居せずに別居することの最大のポイントは、生活費がかなり嵩（かさ）むことでしょうか。しかし、別居して気づいた事柄は、この負の側面を補って余りあると信じています。機会があれば、積極的に熱年別居を試みられては如何でしょうか。

熱年別居、その功罪 寺岡 弘文

リレーエッセイ

文責 吉岡 芳夫

今年七月の「短歌の会」にて発表した短歌： いつの間に熱年別居七年目 やっと気がつく 妻ありがたき （弘文）

エッセイ

私は元警察官でした。 佐々木晃一

私の前職は愛知県警の警察官です。そのきっかけは学生時代に、あるところで火災現場に遭遇し、野次馬が「この家には年寄りがいる」などと騒いでいる時に消防車が到着しホースを伸ばして音を立てて放水した瞬間、たちまち鎮火したのはショックでした。

私はそれまで就職先は一般会社にもと考えていましたが、この件で社長の金儲けの手伝いより公共の仕事につくべきだと自覚した次第です。警察学校でクラス級長も経験し、剣道初段も取得しました。卒業後名古屋市内の三警察署を歴任しましたが、当時交番のことを派出所と言っていました。